

# 倫理II(2012冬・月3・高橋哲哉) 試験対策プリント

2012 年度入学文科三類 18 組 ももいろトロツキーZ&マー

このシケプリ中における、このフォントの文章は配布資料からの引用である。また、諸先賢方のシケプリを大いに参考にさせて頂いた。ここに感謝の意を表明する。

## ◎「ゆるし」のニュアンスの差異

**赦し forgiveness, pardon** : 倫理的宗教的ニュアンスをもつ。ユダヤ・キリスト・イスラム教など一神教・アブラハム系宗教観が基盤。

**許し permission** : 「～してもいいよ」という「許可」。

※しかし資料によっては使い分けがなされていないので、引用にあたりその場合はそれに従った。

## Introduction:ホロコースト Holocaust と倫理

テーマ:「赦し」(英 forgiveness 仏 pardon 独 Vergebung)

→西洋ではキリスト教が伝統的にその役割。

ホロコーストは西洋倫理の枠組みを根本的に崩壊させたのだ。

「どんなに人間的に潔癖であっても、必ず過ちを犯す。」…カント的善悪二元論では扱えない。

→「赦し」の思想化 by ヘーゲル



20世紀: WW1、WW2、冷戦、民族紛争などが頻発

特に…**ホロコースト**

cf,ジェノサイド genocide : 民族浄化

→「赦し」可能性と不可能性を提起。「赦しの可能性を超越してしまったのでは？」

⇒「これらの過去を踏まえた上で、どのようにしてこの大きな傷を人類が乗り越え、和解 reconciliation に達するべきか？」

◎「和解のグローバル化」の動き ←ユダヤ教・キリスト教的欧米宗教観の世界的拡大

⇒成否はともかく、対立を克服し、和解を目指す動きが世界各地で広く発生。

「過去の克服 mastering of the past」(現在を苦しめる原因としての過去をどう乗り越えるか)  
ex.)

独：ホロコーストをどう乗り越え、ユダヤ人とどう和解するか

仏：ヴィシー政権下でのユダヤ人迫害の克服

東欧：冷戦終結後過去のユダヤ人迫害を謝罪・賠償

パレスチナ紛争：ラビン首相とアラファト議長の和平交渉

冷戦の終結：東西対立からの和解

南アフリカ・マンデラ大統領誕生：アパルトヘイトの克服

⇒悔悛 repentance (加害者がその行為を悔い、赦しを請うこと)と和解 reconciliation の並行性が見られる。

ここまでの例は、政治面に関する出来事であるが、「和解と赦し」は宗教の次元、倫理・道徳の次元も関わるものである。つまり、日常的な場面（親子関係・友人関係など）においても存在する。

ex.)人間個人同士が対立し、傷つけた後、関係を修復しようとする。凶悪事件が生じた際の「許せない」という言葉。

「赦し」は可能か不可能か？可能ならどのように可能なのか、不可能ならそれはなぜか？正解のない問いである。

## I : ハンナ・アーレント Hannah Arendt

1906 独の世俗化したユダヤ系家庭に生まれる。(西欧ではそんなにユダヤ教は熱狂的でない。一方東欧では共同体維持のため信仰が熱心。)

マルティン・ハイデガーMartin Heidegger に師事、哲学者に。専攻はアウグスティヌス。

1933 ヒトラーのナチスが政権獲得→仏に亡命。

1940 独の仏占領→米亡命、ホロコーストから逃れる。

1945～ 哲学者として活動開始。ホロコーストとそれを実現した全体主義に対する問題意識から、政治哲学を思索。

1975 死去。

著書:『人間の条件 The Human Condition』、『全体主義の起原 The Origins of Totalitarianism』

## なぜハンナ・アーレントか？

「赦し」は西洋哲学の最重要テーマの一つ。（∵キリスト教は Jesus の処刑とそれへの「赦し」が起源である）

ホロコーストを経て「赦し」に関する議論が再出発したが、その原点が彼女。彼女は問題意識をホロコーストに置き、それを行った「ナチズム Nazism = 全体主義」の背景はどこにあったのかを論じる。

彼女は「政治 politics」が破壊された時（＝「政治的なもの」の否定）に生ずるのが全体主義であるとし、彼女は「政治」を肯定、人間社会に不可欠なものとした。

## i. 『人間の条件 The Human Condition』(資料①)

### 実践 praxis の三層構造概念:活動 action・仕事 work・労働 labor

「実践 praxis」：様々な利害から行動に移すこと⇔「観想 theoria」：古代ギリシアのアゴラでの思索みたいなイメージ

彼女は古代ギリシア以来格上とされてきた「観想」に対し、「実践」を重視すべき、とした。

①**労働 labor**：生命過程の反復的サイクルに閉じ込められ、労働と消費の必要に永久に従属する。種・個の生命維持・生殖のためにすべき生産・労働。動物と変わらない活動である。（ex.食事・農業など）

②**仕事 work**：作り、制作し、生産する(中略)道具の作り手として、労働の苦痛と困難を和らげるだけでなく、耐久性をもつ世界をも建設する。労働によって維持される生命を救済するものは、制作によって維持される世界性である。  
一定の持続性・耐久性をもったモノ（道具、建物、組織 etc.）を製作すること。基本的に一人で行う。（ex.都市・建築・芸術作品）

③**活動 action**：人間と人間が関係しあって、活動と言論という相互に関連した能力を用いながら互いに他者の前で自己表現、アイデンティティを表すこと。よって action は本質的に多数性 plurality をもつ。

アーレントは actionこそ最も高次な、「人間をして人間たらしめる本来の人間的活動」であるとし、政治 politics を公的空間 public space における action の一種とみなした。

⇒市民が公的空間に出、人間相互の関係の中で言動をもって自分が誰であるのか示す action が政治である。これこそが人間が自由であることの証明である。⇔「全体主義」

### action の二つの弱点とその救済 remedy

#### ①不可予言性 unpredictability：未来の混沌とした不確かさ

人間と人間の関係における action だからこそ、結果は不確かである。（work の「共同作業」は誰か一人の計画に基づいてやるものに過ぎない）

②不可逆性 irreversibility：人間が自分の行なっていることを知らず、知ることもできなかったにもかかわらず、自分が行なってしまったことを元に戻すことができないということ  
公空間における action だからこそ、一度行ってしまったことを元に戻すことはできない。

しかし、これらに対して活動そのものの潜在能力の一つが救済に当たる。

#### ①不可予言性⇔約束 promise（未来志向的）：

自分自身を約束で拘束することにより、——未来は本性上そうである——の中に、安全な小島を打ち立てるのに役立つ。このような小島がなければ、人間関係において耐久性はもとより、連続性さえ不可能である。

約束の実行に拘束されることがなければ、私たちは、自分のアイデンティティを維持することができない。（中略）なぜなら、この他人は、約束をする人とそれを実行する人とが同一人物であることを確証するからである。

将来の事態を確定するために他者と約束をし、約束を守る。

#### ②不可逆性⇔赦し forgiving（過去志向的）：

自分の行った行為から生じる結果から解放され、赦されることがなければ、私たちの活動能力は、いわば、たった一つの行為に限定されるだろう。そして、私たちはそのたった一つの行為のために回復できなくなるだろう。

ついでにいえば、過去の行為の「罪」は、ダモクレスの剣（註：ギリシア神話で、王座の上に髪の毛一本でぶら下がっている剣）のようにすべての新しい世代の上にぶらさがっているのである。

⇒許しと約束というこの二つの能力は、共に多数性に依存し、他人の存在と活動に依存している。というのは、だれも自分自身を許すことはできないし、だれも自分自身とだけ取り交わした約束に拘束されていると感じることはありえないからである。

### 「赦し」と「ナザレのイエス Jesus of Nazareth」

許しというのは、活動から必ず生まれる傷を治すのに必要な救済策であるが、人間事象の領域（＝action の空間）で許しが果たす役割を発見したのは、ナザレのイエスであった。

これは宗教的レベルではなく、世俗的レベルで考えるに値する。なぜならもともとキリスト教の宗教的託宣と関係がなく、イスラエルの公的権威に（中略）対する真の政治的経験の一つであったからである。

→「敗北者を大切に<sup>バルケーレ・スビエクテイス</sup>する」ローマ的原理や、ほとんどすべての西洋の国家元首の特権であり、やはりローマ起源と思われる、死刑減刑の権利との関連が見られる。

○彼女が「イエス・キリスト Jesus Christ」を宗教的視点のみならず世俗的視点で注目していることが「ナザレのイエス」という表現から見て取れる。

### 「イエス」の言う「赦し」とは

#### ①「神だけが赦しの力をもつのではない」

## ②「赦しの力は神に由来するのではない」

「もしも、あなたがた(=人間)が人々のあやまちをゆるすならば」、神も「同様に」ゆるすであろう(イエス)  
⇒人間による「赦しの義務」の発生

∴「彼ら(=人間)は自分のなすことを知らないから」(十字架上のイエスが放った言葉『ルカ福音書』)  
→だから極端な犯罪と意図的な悪(=「根源悪」)には、これは適用されない。なぜならその場合には、  
「もしあなたに対して一日に七度罪を犯し、そして七度『悔い改めます』と言ってあなたのところへ帰ってくれば、許してやるがよい」と教える必要はなかったであろうから。(中略)イエスによれば、それは、地上の生活ではまったくなんの役割も果たさない最後の審判において神によって考慮されるだろう。  
(ここでアーレントは宗教的な文脈で言っている。「ナザレのイエス」→「イエス」に注目。)

⇒罪は日常的な出来事であり、それは(中略)活動の本性そのものから生じる。そこで、生活を続けてゆくためには、許しと放免が必要であり、人びとを、彼らが知らずに行った行為から絶えず赦免しななければならない。人びとは、このように自分の行う行為から絶えず相互に解放されることによってのみ、自由な行為者に留まることができるのである。

## 「赦し」=「罰」↔「復讐」

「復讐」は「赦し」とともに「活動」action に対する「反活動」re-action である。

**復讐 vengeance :**

最初の罪にたいする反活動の形で行われる活動

→人は最初の罪の帰結に終止符を打つどころか、(中略)過程に拘束されたままとなる。

罪にたいする当然の自動的反応であるから予期され、計算さえされうる。(∴action の過程は不可逆的)

**赦し forgiveness :**

単に反活動するだけでなく、それを誘発した活動によって条件づけられずに新しく予期しない仕方  
で活動

→許す者も許される者をも共に最初の活動の結果から自由にする唯一の反応である。

○許しを説くイエスの教えに含まれている自由というのは、復讐からの自由である。なぜなら復讐を続けた場合、行為者と受難者は共に、活動過程の無慈悲な自動的運動の中に巻き込まれ、この活動過程は、許しがないままに終わることではないからである。

「赦し」と「罰 punishment」、この二つはよく似ていて**代替物**の関係にある。なぜなら共に、干渉がなければ際限なく続く何か(=復讐)を終わらせようとする点で共通しているからである。

人間は、自分の罰することのできないものは許すことができず、明らかに許すことができないものは罰することができない。

⇒これは、カント以来「根源悪」と呼ばれている罪である。このような罪は、罰することも許すこともできず、したがってそれは、人間事象の領域(=action の世界)と人間の潜在的な力を超えているだけでなく、(中略)人間事象の領域と人間の潜在的な力が共に根本から破壊されてしまう。

## カントとアーレントの「根源悪」「極限悪」

カントによる定義は…

「**根源悪** radical evil」：**道徳律** moral law（自然法則と同様に道徳・倫理に存在する、実践理性が否定することが出来ないような普遍的法則）の存在を理性では認識しているが、道徳律よりも**自己愛**を優先してしまうという、**人間性の根源に根ざしており根絶不可能な悪**。

「**極限悪** extreme evil」：悪のために悪をなす。すなわち**道徳律を否定し、それへの反逆自体を目的とする**ような悪。

○カントによれば、自己愛は人間の本質的な欲求に基づくから、根源悪は根絶不可能なものである一方、道徳律の存在を否定するような極限悪は悪魔的な意志であり、理性のある人間には存在しえないものである。

⇒アーレントが「**根源悪**」(=ホロコースト)とするものは、カントにおいては「**極限悪**」に近いものである。

## ii. 『全体主義の起原 The Origins of Totalitarianism』(資料②表)

アーレントによると

「**全体主義** totalitarianism」 = **ナチズム** Nazism ・ **スターリン主義** Stalinism

※イタリアのファシズム・日本の軍国主義・中国の毛沢東主義などは極端なナショナリズムである。なぜなら「強い国家」を作ることイデオロギーが帰結しているからだ。

一方、全体主義は特定の**政治的イデオロギーの追求自体が目的化**している

→「人類史には法則があり、滅びるべき者がいる。」

**ナチズム**：ユダヤ人 (⇔アーリア人)

**スターリン主義**：ブルジョワジー (⇔プロレタリアート)

⇒強制収容所による「**絶滅政策**」

ホロコーストによって不可能だと思われていた悪が可能となってしまった。不可能なことが可能にされたとき、それは罰することも赦すこともできない**絶対の悪**となった。この悪は、利己主義や貪慾や利慾や怨恨や権力慾や怯懦のような悪い動機をもってしてはもはや理解することも説明することもできまい。それ故また怒りをもってこれに報復することも、愛によってこれを忍ぶことも、友情によってこれを赦すこともできまい。

従来の哲学や宗教では理解不可能な悪であり、軍事的（ユダヤ人抹殺のための人員・物資の輸送）・政治的（国際的批判）・経済的（ユダヤ人の財力）観点に立っても、どの観点に立っても「**合目的性**」が見出だせない。

（だって単なる「ユダヤ人絶滅させたるわ」っていうヒトラーのワガママ、いやイデオロギーの追求なんだから）

→われわれがあらゆる尺度をぶちこわしてしまうような途方もない現実のなかで直面するものを理解しようとしても、**抛りどころとすべきものは実際ないのである**。

⇒よって赦すことも罰することもできない。



### ◎先生の疑問

アーレントは理解・共感できないために赦すことができないといったが、果たしてそれは本当なのか。

赦しが悪をゆるすことなら、その悪が理解・共感できるのなら、すぐに解決してしまう。

むしろ、理解・共感できないからこそ、赦しが必要なのではないか。

### iii.『イエルサレムのアイヒマン―悪の陳腐さについての報告』 (資料②裏)

**アドルフ・アイヒマン Adolf Eichmann**：ナチスの官僚。

ユダヤ人絶滅作戦でゲットーのユダヤ人をポーランドの収容所に輸送する指揮をとったが、機械的に自らの職務を遂行したに過ぎなかった。直接手を下してはいない。

1960年までアルゼンチンで逃亡。モサド（イスラエルの諜報機関）に捕まり裁判にかけられる。

ホロコーストは「人道に対する罪 crimes against humanity」が創設される契機となった。ハンナ・アーレントはアイヒマン裁判を傍聴しこれに問題提起。

アイヒマンは凶暴で野蛮でもない、ただ普通の平凡なドイツ人。上の命令に忠実に従っただけだ。「悪の陳腐さ」

→これがホロコーストを可能にした。ドイツという国家機構の一つの歯車として、莫大な数の人々が働いた。

### アイヒマンはなぜ死刑になったか？

イスラエルの裁判の判事曰く、

悪を行う意図が犯罪の遂行には必要であるという近代の法体系に共通する仮説がある。

いわゆる「同害報復」という命題をわれわれ(=「近代人」といってイスラエル)は拒否し、そのような主張を野蛮とみなす。

↑しかし、

アイヒマンがそもそも裁判に附されたのはまさにこの長い間忘れられていた命題にもとづいてであるということ、そしてこの命題こそ実は死刑を正当化する究極の理由であるということは否定出来ないと思う。

アーレントは「正義」であるイスラエルの裁判を批判した。

「最終的解決において君(=アイヒマン)の演じた役割は偶然的なものに過ぎず、ほとんどどんな人間でも君の代りにやれた、それ故潜在的にはほとんどすべてのドイツ人が同罪である」つまり「すべての、もしくはほとんどすべての人間が有罪である場合には有罪なものは一人もいない」というアイヒマンの主張を一蹴。

ここで、アイヒマンが逆境に置かれていたからナチスの虐殺に荷担したと仮定する。しかし、大量虐殺の政策を実行し、それ故積極的に支持したという事実は変らない。(∴政治とは子供の遊び場ではないからだ。政治においては服従と支持は同じものなのだ。)

→「あたかも君と君の上官(=ナチス)がこの世界に誰が住み誰が住んではならないかを決定する権利を持っているかのように——政治を君が支持し実行した」

⇒「何人からも、すなわち人類に属する何ものからも、君とともにこの地球上に行きたいと願うことは期待し得ないとわれわれは思う。これが君が絞首されねばならぬ理由、しかもその唯一の理由である。」

○あれれえ～？おかしいな～。(江戸川コ○ン)

**アーレントはアイヒマンを「生きるべきでないもの」と断罪**

**=ナチスは ユダヤ人を「生きるべきでないもの」と断罪**

前提は大きく異なるにせよ、地上に生きることを認めないという結論が共通する

### ◎先生の疑問

地球で生きる権威を奪っている？

論理の飛躍？

ナチスを赦せなくても罰することができるのでは？

## II:ウラジミール・ジャンケレヴィツチ Vladimir Jankélévitch

両親がドイツからフランスに亡命したユダヤ人のロシア系ユダヤ人。哲学教授だったが、ナチス占領期にレジスタンスに加入。ヴィシー政権と戦う。

ナチス占領期のフランス

北部：ナチス・ドイツによる直接占領

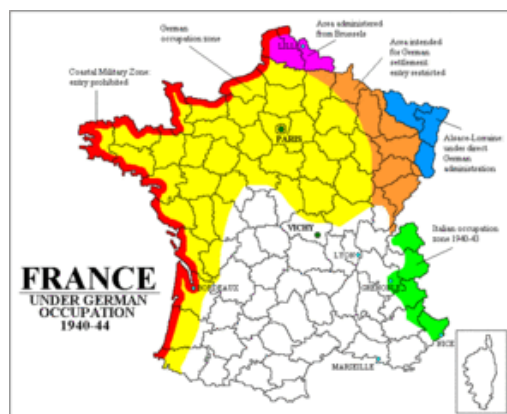
南部：ヴィシー・フランス（首班：ペタン元帥）

…反共和政、自由・平等・博愛を否定、

反ユダヤ主義の下、ナチスの絶滅計画に協力。

### 時代背景

ナチスの犯罪人への時効 prescription が話題になった 1970 年の文章。





ナチス犯罪はニュルンベルク国際軍事裁判（1945）や米英仏ソの各占領地域の軍事裁判所で裁かれた。その独立後は西ドイツの国内法で訴追された。

1955 年時効（10 年）の犯罪：時効が認められた。

1960 年時効（15 年）の犯罪（故殺罪）：時効が認められた。

1965 年時効（20 年）の犯罪（謀殺罪）：時効が 5 年延長された。

∴時効を認めるとナチス犯罪が訴追できなくなる。→国際世論（特にイスラエル）の紛糾

1970 年代：社会民主党への政権交代。ブランドの「東方外交」に象徴されるような、「過去の精算」への国内世論の高まり。

⇒1979 年：ドイツ国内法謀殺罪の時効が撤廃（国際法では時効なし）

## i. 『われわれは許しを乞う声を聞いたか？ Nous A-t-On Demandé Pardon?』(資料③)

### フランス人に対する批判

ナチス・ドイツ&ヴィシー政府の下でナチスに協力するフランス人が多くいたが、当時の虐殺の意味を理解すること、追及することは不完全に終わった。

そして 1945 年時点で占領軍と和解し罪を「忘却」しようとし、無関心、道徳健忘症、一般に浸透している浅はかさのおかげで、今日では、許しは長らく前から既成事実となっている。すべてはすでに許され、清算されている。忘却は時効の前にすでにその仕事を成し終えていた。時効の後、それは言わば公認のものとなり、規範化されるわけである。

※「赦し」・「忘却」・「和解」・「時効」の類似点・相違点をどのように捉えるべきか

赦しが成立していても、忘却・時効が成り立たないこともある。

一方、赦していないが、忘却し、時効が成り立つこともある

つまり、

①犯罪の忘却が生じるのは軽薄な心のせいである。

②時効は忘却を法的・公的に規範化・正統化させる。

→ジャンケレヴィッチは、時効が認められれば、ホロコーストは規範としても軽薄な心持ちで捉えられるようになるとする。

### ドイツ人に対する批判

ドイツの後悔、それは(中略)「敗北」と呼ばれるものである！軍事上の後悔なのだ。しかもそれは、経済活動の名における貿易面での後悔、国家理性の名における外交上の後悔でもある。それゆえ、後悔について、カトリックで言うような痛悔の念は存在しない。

※ドイツの時効延長は金銭取引と同様の観点で行われた。

=ドイツの利益を考慮してなされたもので、悔悛の念によるものでない。

⇒**損得勘定に基づくレベルと赦しのレベルは異なる**ということを主張

時効を認める者、時効に無関心な者を批判

ホロコーストには無関係な若者にも批判

⇒赦しは加害者の側から、先行して通悔の念をもって乞うことが必要。

でも、若者を含め、ドイツ人にそのような動きは見られない。

⇒ジャンケレヴィッチはドイツ人全体を、罪への悔悛の念から逃れているものとして厳しく批判。

※もちろんドイツ人の中にも悔悛の念を持つ者はいた(ex.カール・ヤスパース)

### ■ **ジャンケレヴィッチの「赦し」の条件と「赦す権利」**

①**赦しを乞う**：許し！だが彼等はわれわれ(＝ユダヤ人)にかつて許しを乞うたことがあるだろうか？

②**見放された境遇・恵まれない環境など、赦しを得る者の厳しい状況**：罪人の悲嘆と見放された状態こそが唯一、許しに対し、その意味と存在理由を与えるだろう。罪人が「経済の奇跡」によって(中略)恵まれた生活をし、富んでいるならば、許しなどは腹黒い冗談である。

③**犯罪の性質**：許しは、絶滅キャンプの中で死んだのだ。厳密な意味での悟性が理解不可能なことに對してわれわれが抱く恐怖は、同情心が生まれるやいなや、その同情心を押さえつけるであろう……。たとえば、被告人が我々に哀れを催させるとしてもである。(アーレントの考え方に似ている)

④**犠牲者本人にだけ赦す権利がある**

④について、

われわれの名において赦すことなど、彼等は何の資格があつて自分に赦すことができるのだろうか？  
誰が彼等にそれを依頼したのか、あるいはそれができる権利を与えているのだろうか？

→**非ユダヤ人がユダヤ人の立場から加害者を赦す権利はない。**

加えて

個人的に受けた侮辱であるならば、(中略)赦すのは個人の自由である。しかし、それが他の人たちが受けた侮辱ならば、その人は何の権利があつてそれらの侮辱を赦すのか？(中略)なぜ許すのがわれわれ、生き残りたちの方なのか。

→**赦せるのは殺害された者に限られる。生き残ったユダヤ人さえ赦しの権利はない。**

⇒**死者は赦すことが出来ない。よってホロコーストに赦しはない。**(cf. VI 『カラマーゾフの兄弟』)

○では、なぜジャンケレヴィッチは時効に反発するのか？

⇒あれらの数え切れない死者たち(中略)は、われわれの問題である。(中略)大量殺戮された者たちには、もはやわれわれしか彼らのことを考える者がいない。もしわれわれがそのことを考えるのを止めたならば、われわれは彼らを完全に抹殺し終えることになり、それにより彼らは永久に無に帰されてしまうだろう。

## ii. 『ジャンケレヴィッチとウィアード・ラベリングの往復書簡 Lettres pour un pardon』(資料③b)

**ウィアード・ラベリング Wiard Raveling**：ドイツ人。ホロコースト後の世代だが、ジャンケレヴィッチにドイツの過去の犯罪への悔悛の念を表明。しかし、ラベリングの卑下するコメントはジャンケレヴィッチへの皮肉ともとれる。

ジャンケレヴィッチ：ラベリングのような、ナチスの行為を十分に引き受け、かつそれとはまったく関係のない人からの言葉を待っていたと述べる。しかし、「赦しは不可能」という立場は崩さない。

※書簡中に一度も「赦し」という言葉が出てこないことには注意が必要。

## III: カール・ヤスパース Karl Jaspers

第二次大戦前はマルティン・ハイデガー Martin Heidegger と並ぶ世界的哲学者であった。

ヤスパースはナチス賛美をしたハイデガーと違い、ナチス政権時は批判を表立って展開できなかった(妻がユダヤ人だった)が、戦後『罪の問題 Die Schuldfrage』(1946)を著し、ドイツ人としてドイツの罪を考えた。アーレントとヤスパースの書簡が残る。

### i. 『戦争の罪を問う』(資料④)

ドイツには、自分も含めて罪を認める人々もあるが、自分は罪はないが、他の人たちには罪があると説くような人が多い。

戦後、ただでさえ生活苦であるのに弾劾が加わっている。それにもかかわらず、最悪の事態に突き落とされた人でも、この弾劾が正しくないのか、正しいのか明らかにしたいという気持ちから、落ち着いた真理を求める衝動を感ずる刹那がある。

事実、われわれドイツ人には、われわれの罪という問題をはっきりと洞察し、そこから当然の帰結を引き出すという義務が一人一人に課せられている。それはわれわれの人間としての尊厳によって生ずる義務である。

罪の問題は他からわれわれに向けられる問題というよりは、むしろわれわれによってわれわれ自身に向けられる問題である。われわれがこの問題に心の底からどのような答えをするかということが、われわれの現在の存在意識・自意識の基礎になるのである。それはドイツ魂の死活問題である。

勝利者の側からする有罪宣告は(中略)内面的な転換という決定的な点では、われわれの助けにならない。この点では自分を相手とするほかに道がない。

### 「4つの罪」

①**刑法上の罪（審判者：「正式の手続きを踏んで事実を信託するに足る確実さをもって確定し、これに法律を適用するところの裁判所」）**：「勝者の裁き」ともいわれる。これは甘受しなければならない。問題なのは自然法と国際法の中で公平な裁判であるかということ。

②**政治上の罪（審判者：「戦勝国の権力と意志」←「勝利が決定権をもっている。恣意と権力との緩和は、あとあとの結果を顧慮する政治的狡智によって、かつはまた自然法および国際法の名のもとに通用する規範を承認することによって、行なわれる」）**：為政者の行為において成立し、また私が或る国家の公民であるために、（中略）その公民たる地位においてこの罪が成立する。唯一集団上の罪である。政治は結果主義であるから、支持した人々皆が罰を受けるとき、支持していない人もはびこらせた点において罪を負う。非ナチ化＝民主化・犯罪人の処罰（政治上の罪）により償われる。

③**道徳上の罪（審判者：「自己の良心であり、また友人や身近な人との、すなわち愛情をもち私の魂に関心を抱く同じ人間との精神的な交流」）**：私のすべての行為について、したがって私の政治的および軍事的行為についても、私は道徳的な責任がある。命令されてもやってしまったことは罪となる。情状酌量があっても罪は罪である。

④**形而上的な罪（審判者：「神だけである」）**：人間相互の間ではと言えないが、神に御前において後ろめたさを感じる。③との違いは自らが「罪」を犯しているかどうか。④は罪を犯していない。

ex.)隣人のユダヤ人が連れ出されそうになっても、自分の命を、家族の命を守るために何もしなかった。他人がそれを責めることはできない。しかし後にこの行為に罪悪感を覚えてしまう。

※これら道徳倫理上の罪をより広く社会全体に適用することができる。

ex.)政治家・ジャーナリズム

## ■「集団」(国家や人類)と「個人」の関係

4パターンある。

1. 集団→個人（刑法上の罪）

2. 集団→集団（政治上の罪）

3. 個人→個人（道徳上の罪）

4. 神→個人（形而上的罪）

（神→集団？）

アーレントは当初、ホロコーストを赦すことも罰することもできないとした。（∵動機が分からない、理解できない）

⇒エルサレムのアイヒマン裁判で上図の1は可能だと考えるようになった。

## ii. ユルゲン・ハーバーマス Jürgen Habermas

### 『歴史の公的私用について』(資料④')

ドイツ人はホロコーストを可能とした生活様式のうちで生きている。そして、それにアイデンティティを負っている。つまり、当時のドイツ人が責任を負うことができるだけでなく、ヤスパースの意味の集団的共通責任においてその後の子孫もなにがしかの責任を受け継いでいる。

なぜなら、

1. ドイツにおいてこそ我々は、ドイツ人によって虐殺された人々の苦悩への追憶を、(中略)目覚めさせておく義務がある。追憶という手段によってドイツ人としての連帯をはかる権利があり、それを無視してはいけないから。

2. 我々(=ドイツ人)が——我々自身のために——自らの伝統に対応すべきだから。ナショナルな自己意識を生み出すのは批判的に分析した伝統からであり、道徳を破壊するような伝統(ホロコースト)まで見つめる必要があるから。

## IV: 集団－集団の赦し

### ジャック・シラク仏大統領演説 1995年7月16日(資料③c)

過ぎ去らない過去はドイツにとってはナチスであるが、フランスにとってはヴィシー政権である。なぜなら、フランスもホロコーストに協力し、フランスの警察によってユダヤ人は収容所に連れて行かれたから。

ヴィシー政権は反共和政、「自由・平等・博愛」を否定した「家族・労働・祖国」の保守政権であり、今までのフランス共和国政府・大統領は責任を認めてこなかった。

初めて認めたのがジャック・シラク大統領(任 1995~2007)。

「フランスはあの日、償い得ないこと(l'irreparable)をしてしまいました。(中略)私たちは、彼らに対して、時効にできない負債(dette imprescriptible)を負っているのです。(中略)ユダヤ民族と、その苦痛と収容所の記憶を伝えること。何度も何度も証言すること。過去の過ちを認め、国家によって犯された過ちを認めること。私たちの歴史の暗黒の時代について何一つ隠し立てしないこと。これらは、要するに、人間と言う理念、その自由と尊厳を擁護することに他なりません。」

このシラクの演説の背景にはジャンケレヴィッチの思想がある。

「無数の死者たちの運命は、私たち皆にかかっている。もし私たちが彼らのことを考えるのを止めてしまふなら、私たちは絶滅を完成することになるだろう」

その後 Manrice Papon(仏でアウシュヴィッツへのユダヤ人移送の責任者)がシラクの演説の後に有罪判決を受けた。このことは、ヴィシー政権をフランスの国家であると認め、フランスの

国家領域内で犯罪が行われたことを認め、フランス国内でナチスに加担したフランス人を裁くことが認めたとのことである。

### リヒルト・フォン・ヴァイツゼッカー独連邦大統領演説『荒れ野の四〇年』 1985年5月8日(資料⑤a)

ヨーロッパ最大のユダヤ人地区ワルシャワ・ゲットーのワルシャワ・ゲットー記念碑(ユダヤ人蜂起を後世に残すためのもの)に1970年、ブランドがドイツ首相として訪れた。

過去の克服がこれをきっかけに始まる。ユダヤ人を迫害した罪を乗り越えること。

「罪の有無、老若いずれを問わず、われわれ全員が過去を引き受けなければなりません。全員が過去のもたらした帰結に関わっており、その責任をおっています。過去に目を閉ざす者は、結局のところ現在にも盲目になります。」

ユダヤ人迫害を直視する。70年代以降の流れがヤスパースの言動にそったものになる。

しかし、5月8日は記念日ではなく、喜ばしい日ではない。赦しを求めるという言葉はなかった。ただ哀悼の意を示しただけ。

### ローマン・ヘルツォーク独大統領演説@ワルシャワ 1994年8月1日(資料⑤b表)

ベルリンの壁が崩壊、東西ドイツの統一がもう実現。ワルシャワ蜂起50周年記念にドイツ大統領が招待されたときのこと。画期的な出来事で、世論の反対も根強かった。史上初の「赦しを乞う」というフレーズがでる。

「わが国の国家元首として私は、大統領閣下、そしてポーランドの国民の皆様が、私をこの場に招待してくださったことに心から感謝いたします。(中略)私たちが必要としているのは、二つの国民が歴史の無残な出来事に対して、完全に開かれた態度をもつことです。(中略)赦しを必要とし、また赦す用意があるという意識をもって。(中略)私はドイツ人によって皆さん方になされたことについて、赦しを乞います。」

※「ワルシャワ蜂起」(1944):ナチス・ドイツからの開放を求め、「国内軍」を中心とする抵抗組織が市民の参加のもと起こした。(てかソ連が「解放」地域に親ソ政権を作ったことへの危機感もある)最初成功するが、ソ連軍はワルシャワ目前にして進撃方向を変える(死ねよスターリン)。ドイツ軍は体制を立て直し、徹底的に鎮圧と破壊。死者およそ20万人。

### ヨハネス・ラウ独大統領声明@ベルリン 1999年12月17日(資料⑤b裏)

東西ドイツは統一され、東ドイツの独裁政権が崩れた。それをきっかけに東ドイツの大戦中の強制労働被害者が補償を求めて訴えを起こした。



ドイツ政府は企業と財団を設立し、少額ではあるものの補償を行った。

「強制労働被害者の補償に関する合意がついに成立したことに對し、私は感謝するとともに、ホッとしております。(中略)私たちは皆、知っています。犯罪の犠牲者たちに対して、お金によっては、本当に償うことはできないことを。犯された不正を相殺することに意味はないのです。(中略)被害者の皆さんが望んでいるのは、苦痛が苦痛として承認され、自分たちに加えられた不正が不正として名指されることなのです。私は今日、ドイツの支配下で奴隷労働と強制労働を強いられたすべての人々に思いをいたし、ドイツ国民の名において赦しを乞います。」

重要なのは、お金での解決ができないと認めた上で加害責任を認め、彼らが被害者であることを公的に認めたことである。

### ヨハネス・ラウ独大統領演説@イエルサレム 2000年2月16日(資料⑤c表)

「第三者性」が興味深い。ドイツ大統領もイスラエルも第三者である。

「私は、皆さんの多くにとって、今日この国会でドイツ語を聴くことが何を意味するか(＝苦痛を意味する)を知っています。(中略)イスラエル国民の皆さんの面前で、私は謙虚に、墓もない死者たちの前に頭を垂れ、赦しを乞いたいと思います。私は、ドイツ人が行ったことについて赦しを乞います。また、私と私の世代に対する赦しを乞います。」

イスラエルはユダヤ人の被害者の代表となれるのか。欧州での混乱がシオニズム高揚を後押ししたことは事実であり、イスラエルの根源はシオニストたちである。

しかし、ホロコーストのときに、彼らは欧州に残るユダヤ人を批判して、彼らを気にすることなく同情心も持たなかった。イスラエル建国を担うシオニストはむしろナチに協力していたという歴史家もいる。迫害が強くなってどんどんイスラエルに人々が流入し建国がしやすくなるという仕組みがあった。

戦後、正義の国というアピール(1960～)を行い、ホロコーストを受けた被害者国として強い立場に立った。ホロコーストとの連続性を捏造したか？

### シュレーダー独首相の露紙への寄稿 2005年(資料⑤c裏)

「ドイツ人の名において、ロシアその他の民族が(ナチスの侵略で)受けた苦難への許しを請いたい」

### 政治的な「赦し」の意味

法的政治的なモノにはどうしても、「第三者性」が入る。

「赦し」は加害者・被害者の二者間にのみ通用するというジャンケレヴィッチの考えにおいては、法的政治的なもの（恩赦、元首のスピーチ）は成り立たない。ユダヤ人は自分を虐げたドイツ人本人に「赦し」を乞うてほしいのだ。

政治的行為は法によって正当化されるが「赦し」は成り立たない。しかしその行為が無意味であるということではない。

### ◎近年の和解 reconciliation の風潮

国際的な和解 ex.)ドイツとポーランド

国内の和解 ex.)フランス人とユダヤ人、アパルトヘイト後の「国民和解委員会」

「国民和解委員会」：デズモンド・ツツ Desmond Tu Tu 委員長の活躍によって、被害者の不満も多かったが成功した。告白により政治的罪を免除するというものだった。

## V:「赦し」の条件とは？

ジャンケレヴィッチの「赦しを乞うこと」「悲観にくれ見放された状態にあること」に関連して。「無条件の赦し」って本当にあるのだろうか。

## カント『人倫の形而上学』

公的正義の基準は、同害報復の法理（タリオの法 ius talionis=as such）以外にはありえない。もし彼が人を殺害したのであれば、彼は死なねばならない。この場合、死刑以外に正義を満足させるものはない。

同害報復の法理（公的に罪と同質・同量の罰を与える）は均等の原理をみたすものであるから、正義（応報的正義）に適う。仮に私的復讐を認めれば、復讐の応酬が無限に続き、歯止めがきかない恐れがある。

○同害報復の法理は厳密に成り立つのか？

ー「目には目を、歯には歯を」という状態であれば、成り立つ

しかしホロコーストの場合、虐殺されたユダヤ人と同数のドイツ人を殺せばよいのか？1人が複数人を殺害した場合や性犯罪についてはどうなるのか？残虐な殺人に対しては、同様の殺し方をするのが善いか(近代国家では不可)？

## ヴィクトル・ユゴー『レ・ミゼラブル』(資料⑥)

ジャン・バルジャンは無実の罪から仮釈放された後、ミリエル司教の家でお世話になった。しかしその日の夜に彼は、司教の銀食器を盗んでしまう。そして憲兵に捕まった。

憲兵は彼を司教の許へ連れてくるが、彼の貧しさを知っていた司教は「私はその銀食器を彼にあげたのであり、彼が盗んだというのは誤解だ。」と主張し、彼の放免を求める。

放免され逆に戸惑うジャン・バルジャンに、司教は次のように言った。  
「あなたが正直な人間になるために、この銀器を使いなさい。」「わたしの兄弟のジャン・バルジャンよ、あなたはもう悪の味方ではなく、善の味方です。あなたの魂を、わたしは買います。暗い考えや、破滅の精神から引き離して、あなたの魂を神にささげます。」

ジャン・バルジャンは赦しを乞うていないにも関わらず、窃盗という法的な罪のみならず、世話になった司教を裏切るという倫理的な罪も赦している。これは無条件の赦しであろうか。

しかし、彼が善人となることを“条件に”赦している、とも考えられる。

### 「佐賀・西鉄バス乗っ取り事件」(資料⑥c)

---

2000 年 5 月 3 日、とあるバスが 17 歳の少年に乗っ取られた。少年は 3 人の女性客を切り付け、1 人を殺害した。

事件後、切り付けられた女性客の一人・山口由美子さんは次のように語る。

「刺された時に、私は血の流れているのを見ながら、彼はここまで傷ついていたのかなということを本当に思いました。(中略)私が死んだら彼を殺人者にしてしまうと思って、倒れないように頑張りました。」

後になって、ここまで彼を追い込んだのは何だったのか、周りのおとなは何をしていたのだろう、もっと早く彼のこういう気持ちに気付いていたならばこんなことを起こさずに済んだのではないかと思いました。」

犯罪の最中に、切られている最中にもう、彼女は少年を赦していたといえるのではないだろうか。「汝の敵を愛せよ love your enemy」を実践しているようにみえる。

しかし無条件の赦しではない。

①相手が少年である。彼を殺人者にしてしまうから生きなければならない。

②こんな所まで追い詰められているのだから、何か彼にあったに違いない。(彼女の息子の経験から)

→少年法の趣旨を尊重する立場

一方で「自らを傷つける者を愛す」というキリストの教えにあっている。

### 「闇サイト殺人事件」(資料⑥f)

---

磯谷利恵(当時 31)は 2007 年 8 月 24 日午後 10 時ごろ路上を歩いている途中、某闇サイトに入出入りしていた川岸健治・神田司・堀慶末の 3 人に強盗目的で拉致され、約 6 万円とキャッシュカードを奪われた。

翌午前 0 時頃には、愛西市佐屋町の駐車場で殺害された。「殺さないで下さい」「話を聞いて」と何度も命ごいをしたが聞き入れられず、神田らに顔に粘着テープを巻きつけた上にポリ袋をかぶせられ、ハンマーで頭をめった打ちにされ、遺体は岐阜県瑞浪市の山中に埋められた。

後日行われた裁判の結果は、以下の通りである。

- ・神田被告——死刑決定
- ・川岸被告——無期懲役(自白による情状酌量)
- ・堀被告 ——死刑→無期懲役→？

これらの判決に対し磯谷さんの母親は無念を滲ませ、被告らの極刑を求める署名活動を始める。以下は母親の言葉の断片だが、「赦せない」という感情が滲み出ている。

「なんの弁護の余地があるのでしょうか。犯人らには、同じ恐怖を与え、同じ風に命を奪って欲しい。これが偽りがたい気持ちです。仇をうたせてください。無念を晴らさせてください。命の代償は命で払って欲しいのです。利恵一人の命が、犯人たちの命の重さより軽いというのでしょうか——」

遺族の「許せない」という主張が多々見られる内容。ここから何を読み取るか。

→もう一度資料に目を戻し、「利恵」と書いてある部分を「ユダヤ人」に置き換え、「一被告」にあたる部分を「ドイツ人」に置き換えてみる。

⇒ジャンケレヴィッチと全く同様の主張が成り立っている。

「赦しはすでに死の収容所で絶滅した」という文に関連し、「犯罪の性質そのものが赦しを不可能にする例」と言えそう。

この事件の 3 人の被告は公判中、互いに罪をなすりつけあったりして全く反省の色を見せなかったそうで、結局「赦しを乞う」という条件も満たしていない。

ドイツ人に対し感情的ともいえるほど厳しいジャンケレヴィッチの態度は、彼固有のものとは言い切れない。

残虐な事件は赦し得ない、という主張は日本の殺人事件でも成り立つ。残虐性は赦しの可能性と大きく関わっているようにも思われるが、どう理解するか。

## 小説『カラマーゾフの兄弟』

アーレントやジャンケレヴィッチの中に、「赦しを乞うこと」に関する記述があるが、具体例をもとに、悔悛の念が赦しに作用するかどうかを考える。

ゾシマ長老(アリョーシャらの信仰上の先生)の元に、社交界の名士が通ってくることになる。彼は有力な地位を持っており、裕福で、多くの人の尊敬を集める慈善家であった。

しかしある日彼は、「むかし人を殺したことがある」とゾシマ長老に告白した。愛していた女性が別の男性と結婚すると明かしたため、かっとなって彼女を殺してしまったというのである。彼は綺麗に証拠を消し、完全犯罪を成し遂げた。

そのため召使が冤罪で捕まり、獄中で死んでしまった。法的にも召使が犯人であるとして決着がついていたため彼は現在慈善家として活動できているが、良心の呵責は膨らむ一方だった。

ゾシマ長老は「罪を世に明かして罪を贖うべき」と彼に言うが、彼は妻子のことなどを考え踏み切れない。しかし結局は文章にして世に告白し、亡くなっていった。客観的にはその罪は立証されなかった。

この状況における罪人は、決して経済的には見放された状態ではない。しかし赦しを与えられない、とは断言しがたいように思われる。なぜか。それは良心における精神的状態が「見放されている」と言えるからであろう。

罪を誰にも言うことが出来ず良心の呵責、痛悔の念に苛まれる状態、すなわち見放されている状態だったからこそゾシマに告白した——赦しを乞うたのではないか。このように考えると、「赦しを乞うこと」と「見放された状態」はリンクしているようだ。

### ■ 奥野修司「高校生首切り殺人事件『心にナイフをしのばせて』」(参考)

1969 年、高校生の少年 A はあるきっかけから同級生・カガミヒロシをナイフで首を切り殺害した。

それによりカガミヒロシの家族の人生は壊された。母親は数年間寝たきりになり、父親は働き通しとなった。そうした家族の中で妹は笑うことが出来なくなった。時間が凍りついてしまったかのようだった。

その間、一方の少年 A はなんと一流大学に入学し、司法試験に合格して弁護士になっていた。自身の家族とは離縁し、名前を変え、別人として日向を生きていた。(少年犯罪は前科にもならないのである)

(少年 A に焦点を当てれば、これこそ見事な更生で、少年法の理念を表した素晴らしい事例とも見られる)

ライターの奥野は、元少年 A が弁護士として活躍しているという事実を被害者の母親に伝えた。すると母親は、「あんな事件を起こしたことで、今は生活に困っているのではないかと同情さえ寄せていたのに、弁護士になったと聞いて裏切られた気分になった。」と言った。

(この母親の言葉こそ、「罪人が悲嘆にくれ見放された状態にあって初めて、赦しは意味を持つ」というジャンケレヴィッチの言葉と等しい感情的基盤を持つ。当然の復讐感情であろうか?)

その後母親は元少年 A に手紙を送った。「この 30 年間何を思って生きていたのか? 一度でも謝罪しようとは思わなかったのか?」といった内容であったが返信はなく、A はヒロシの墓参りにも来なかった。

とある日、母親がふと元少年 A の事務所に電話をすると、なんと本人が出た。動転した母親は、思わず慰謝料の話を持ち出してしまふ。「なぜ一度も謝らないのか。貴方の親が提示した金銭の償いを泣く泣く承諾したのに、それすら払いきることもしない。」

すると A は「なんだ、金の話か。なら実印と証書を用意しろ。50 万円くらいならすぐ用意できるよ。」と言い電話を切った。

数日後、母親が再び連絡し「お金のことはいいから、こっちに来て話してくれ。」と A に言うと、A は「何を言っているんだ、金が欲しいと言うから行ってやっているのに」と言った。

更に母親が「一度で良いから謝りに来てください」と頼むと、A は「なんで俺が謝るんだ」という態度をとった。

（「彼が更生した」とは、被害者が彼を赦す気持ちになれた時に言えることではないのか、と作者は言う）

## 「条件付きの赦し」について

「条件付きの赦し」というものを考えたとき、最後に残る条件とはなんであろうか。

それは金でもなく、加害者が社会的に不成功であることでもなく、加害者の反省ではないだろうか。反省していない加害者を赦すということは、それ自体が不道德な行為と考えられているように思われる。

そのことは、宗教における赦しの観念からも覗える。“テシュヴァ teshuva”(ヘブライ語)という、“痛悔の念・悔悛”を意味する語があるが、これは「突き詰めるとユダヤ教はこれに尽きる」と言われるほどユダヤ教において重要な概念となっているし、またキリスト教においても、新約聖書に回心 metanoia という概念が登場し、また「七回赦しを乞うて来たら赦してあげなさい。」とも書かれている。

## VI: 宗教と「赦し」

### 小説『カラマーゾフの兄弟』

次男のイワン：無神論者

三男のアリョーシャ：敬虔なロシア正教の修道士

居酒屋にて、イワンはアリョーシャの信仰を揺るがそうとする――

#### イワンの主張

ある子供が、投げた石によって將軍の犬に怪我をさせてしまった。  
すると怒った將軍は子供を裸にさせ、母親の前で犬に噛み殺させた。  
ここで苦痛を受けているのは、無垢な子供である。

何らかの罪を犯したことのあるような大人とは違い、無垢な子供の苦しみは絶対に償えず、贖えない。もしも、この母親がこの將軍を赦したとしても、イワンには受け入れられない。

なぜなら、母親ですら、將軍を赦せるのは自分の苦しみの分だけだからである。殺された子供に代わって將軍を赦すことなど出来ない。それは、この迫害者たる將軍が悔い改めていようがいまいが関係ない。

この世界に、赦す権利を持つ者などいるのだろうか？

#### アリョーシャの返答

全てを赦すことの出来る存在、赦す権利を持つ存在はいる。それは、キリストである。



このように取り返しのつかない罪を犯し、それを心から悔やんでも「赦し」を被害者から得ることはできない。それでも生きてゆくために、代わって「赦し」を与えてくれる「究極の第三者＝神」が必要なのだ。

## ■ 韓国映画『密陽 Secret Sunshine』

主人公シネさんは夫を失う。夫の故郷で一人息子ジュン君と暮らそうとするが息子が誘拐されて殺害される。

主人公は絶望するもキリスト教に入信し、信者仲間によって落ち着きを取り戻し、犯人に面会をして「赦し」する決意をする。

しかし、犯人も既に入信しており、シネさんに先んじて、神の「赦し」が殺人犯に訪れていた。赦しが訪れているのに、どうして犯人に赦しをまた与えられるのか。

犯人にしてみれば、悔やんでも「赦し」を被害者から得ることはできない。それでも生きてゆくために、代わって神からの「赦し」が必要だった。

しかし、シネは、「自分が赦す前に神が許した」ということに酷くショックを受ける。神は「犯人とシネさん」「犯人とジュン君」の間に割って入ることはできない。

## ■ ドナルド・B・クレイビル他『アーミッシュの赦しーなぜ彼らはすぐに犯人とその家族を赦したのか』(資料⑥a)

アーミッシュ：宗教改革の中で生まれた再洗礼派（幼児洗礼を無効とし、成年後自覚的に洗礼を受けるべきと説く）の一派。共同体で生活、移民当時の生活を維持し文明機器の導入に慎重。

アーミッシュ小学校における銃乱射事件(2006年10月2日、ペンシルベニア州ニッケルマインズのアーミッシュの小学校に一人の男性チャールズ・ロバーツが侵入し、銃を乱射して複数の女学生を殺害した拳銃、自殺した)に対するアーミッシュの人びとの反応は驚くべきものだった。

彼らは、殺されたアーミッシュの学生だけではなく凶行を犯し自殺したチャールズ・ロバーツの妻子もまた犠牲者である、と考えた。そして次々と妻子の許を訪ねては、赦しの言葉、悔やみの言葉を述べ、更には金銭的支援も行った。

「なぜもう赦すことができるのか？」という質問に対し、アーミッシュの女性はこう答える。「神のお導きです。」「神に赦していただくには、彼を赦さなければいけないのです」乱射事件がおこったあと、住民はすぐに加害者の家族の家を訪れ、励ましの声をかける。

キリスト教の原点（神が赦すには被害者と加害者が赦し合っていないといけない→『密陽』のケースは逆）を示したとして賞賛されることが多いが、アーミッシュへの批判もある。

1. 赦すのが早すぎる。残虐なことをしたものを批判しないような社会に我々は住むことができるのか。正義は下されたのか。

2. ジャンケレヴィッチがいうように、殺されたものの家族が犯人を赦すことはできない。よって、そもそも赦しは成立していない。

○赦しにおける「集団」と「個人」の関係…アーミッシュのコミュニティは犯人を赦していたが、コミュニティの中には本当に赦しきれていない人がいるかもしれない。

○加害者・被害者が両方死んでいる。

### ■ コーリー・テン・ブーム Corrie ten Boom『Tramp for the Load』(資料⑥b)

オランダ人のクリスチャン。ナチのユダヤ人狩りの中、ユダヤ人を匿い助ける「隠れ家」の活動をするが、父は殺され、姉ベッツィーとラーフェンスブリュック収容所（女性収容所）に入れられる。姉は亡くなる。彼女の遺言「神を信じることを忘れないでほしい」

戦後、キリスト教精神のもと「赦し」“Love Your Enemy”を説いて世界を講演、「赦しの使徒」と称される。

「私たちが罪を告白するならば神は罪を海に沈めてくれる——」などと、Corrie がミュンヘンの教会で、神の赦しについて講演をしていた時のこと。

一人の男が彼女に近づき、握手を求めてきた。そして次のように言った。  
「私はナチの親衛隊員でした。[...] 私はその後、クリスチャンになりました。そして神は私のした残忍な行為を赦されました。しかし私は、あなたの口からも赦しの言葉をお聞きしたいです。」

その男は強制収容所で、彼女に対し残忍な行為を行った親衛隊員その人であった。（男は彼女のことを覚えていないようであったが…）

恐ろしい強制収容所での記憶が蘇ってしまった彼女は、手を握り返すのを躊躇った。しかし赦さなければならぬ、と彼女はわかっていた。

「我々が我々を傷つけた者を赦すことが、神の赦しの前提条件である」

「過去の敵を赦すことが出来た者こそが、どんな傷を受けていようとも人生を上手く再建出来た」と理解していたからである。

「赦しは感情ではない、赦しは意志の行為である——だから、手を握り返すための感情を下さい」と彼女は神に祈った。

すると、彼女は自らの手を持ち上げ、相手の手を握ることができた。その時ほど神の愛を感じたことはなかったが、それが自分自身の愛ではないことはわかっていた。

ジャンケレヴィッチの論でいくと、彼は赦しを乞っていたが、悲嘆にくれた状態ではなかった。でも、理解に苦しむ行為を行った加害者を目の前で赦すことができた。そして、死んだ姉の分まで赦してはいないだろう。第三者であるコリーが代わりとなって彼を赦した訳ではない。あくまでコリー自身に対する罪が許されただけだろう。

### ■ 鈴木伶子『神さまのプログラム』(資料⑥d)

日本 YWCA (Young Women's Christian Association) の会長。

朝鮮長老教会の神社参拝決議：1940年代総力戦体制の拡大のなか、仏教キリスト教諸団体を国策に協力させる動き。日本基督教団（プロテスタント諸教会が合同して結成）は朝鮮長老教会に神社参拝を「強要」。しかし、キリスト教信仰を「否定はしていない。」（cf.富田満統理）長老教会は拒否。朱基徹牧師の拷問死（殉教死）。

韓国人クリスチャンの運転手・尹命善は日本人の「私」に対し、「赦しながら行きましょう」と言った。そして自らが朱基徹の孫であることを明かした。

尹命善は、かつて自身が強烈な日本嫌いだったことを語った。しかし彼女は事情により大阪で一泊したある時、友人に誘われるまま神社でお参りをし、そして「日本を赦しなさい」という声を聞いた。

その時は訳がわからなかったが、いま日本人の「私」と話している中で自らの日本への怨恨が消えていくのを感じたという。そして尹命善は「私」を抱きしめ、「これで私は日本人を赦すことができる」と言った。

朱基徹を殺した日本人を彼の孫として代わって赦したわけではない。彼の孫として苦しんだことについて赦しているのだろう。

赦しの条件は、日本で神社に行ったこと。神社で赦しなさいという声が聞こえたこと。「神の声」の後に鈴木さんが韓国を訪れたこと。

ジャンケレヴィッチのいう「無条件の赦し」とはいえない。大阪での神社参拝についてはよく分らない。（⑥bの精霊？）ヤスパースのいうどの「赦し」なのか。

## ヘーゲル『宗教哲学』（資料⑦）

ヘーゲル Georg Wilhelm Friedrich Hegel：ドイツ観念論を完成に導いた。対するラディカルな批判として、マルクス、キルケゴール、コント、フロイト…がある。これの解体から近代哲学が始まる。現代でも依然有力であることには変わらない。

ヘーゲルの歴史哲学：人間は絶えず進歩していく。

キリスト教の本質を哲学的に解釈、「人間精神の真理」を宗教的に把握したと考えた。矛盾を乗り越えてより大きな「自由」に向かっていくという直観にある。「精神の絶対性」

イエスの処刑・復活というプロセスにキリスト教の核がある。「精神の真理」を宗教的に捉えている。

「絶対的なモノ」はそれだけでは成り立たない。なぜならば「絶対的」は「相対的」を前提としているから。真に「絶対的なモノ」相対的なものを含みながらなおかつ絶対的なのである。対立を固定化せずにその対立を乗り越えて更に成長するのが人間精神の力である。

ヘーゲル曰く、カントの倫理は対立構造に雁字搦めになっている。道德法則における善と悪の対立に閉じ込められている。それは宗教的に言うとユダヤ教の段階に留まっている。律法主義によって善悪が区別され、人間が法に従属している。罪を犯したものが「悪」として法により裁かれる。その人が悔い改めても、「善人」としてあくまでも道德法によって評価されている。律法を守らなくては救われない。これがユダヤ教の限界。実際は誰もが律法を犯さざるをえない事態になってしまう。これを乗り越える立場を打ち出したのがイエス、キリスト教である。

カントを乗り越えるヘーゲルの「赦し」。善も悪も、人間存在そのものを肯定する。愛による「赦し」。宗教的には神の赦しが無条件であるとイエスは説いた。イエスが人間の原罪を背負って十字架に処せられ復活したことがこれを象徴している。

最高の神（無限性・善）は人間の姿、しかも最悪の犯罪者イエス（有限性・悪）に自らを落とした。「神は死んだ」（ニーチェはヘーゲルを引用した。意味は違う。）最高のものを否定し、最低のものまで身をやつした上で、そこから逆転が生じて復活する。これは有限性・悪が否定されたということ。人間の原罪を帳消し。神自身が行った人間への「赦し」を象徴。

唯一赦されないもの…「御霊 holy spirits (cf.三位一体説 trinity 位格 persona：父・子・精霊)を潰すこと」つまり「絶対的真理の毀傷、無限の対立の合一という理念の毀傷」つまり、神が赦すという理念を否定してはいけないということ。

### ■ 青野太潮『十字架につけられ給ひしまなるキリスト』(資料⑦a P.36～)

贖罪論を否定。

「全面的に、無条件に。それこそ底なしで、徹底的で、無条件のゆるし」と「精霊をけがす者は、いつまでもゆるされず、永遠の罪に定められる」の矛盾。

「七たびを七十倍するまで」…徹底的な赦し

「精霊をけがす者」＝「無条件の赦し」を否定する者。（∵「無条件の赦し」という命題を否定したら「無条件の赦し」自体が成立しなくなってしまう。）

贖罪論を否定する立場に立つと、それも赦されなければいけないのでは？

### VI: ジーモン・ヴィーゼンタール『ひまわりーユダヤ人にホロコーストが赦せるか The Sunflower』(資料飛び番号・⑧)

オーストリアのユダヤ人の生まれ。ホロコースト期に強制収容所で強制労働に従事した過去。

戦後「ナチハンター」と称される。ナチ犯罪人を追及・追跡し、関係各国に通報した。アイヒマンの逮捕にも関与。批判的な人からは「復讐の鬼」。自分は「正義」だ、という。

以下収容所での経験。

武装親衛隊員やドイツ兵の墓はあるのにユダヤ人の墓はない。遺灰が川に流されるだけ。

ある日呼び出され、野戦病院みたいな所で瀕死の若い親衛隊員の前に通される。彼のユダヤ人虐殺の告白。彼は青年の悔悛を感じ取る。

「死を待ち続けている間、夜ごとに何度も何度も僕はユダヤ人にそのことを話したかった。ユダヤ人から赦しを乞いたかった。赦してほしい。あなたからの答えを聞かずに、安らかな気持ちで死ぬことはできないんだ。」

彼は愕然とする。「彼が死ぬのは早すぎる。でも彼らがやってきたことはどうなるのだろう。赦して欲しいからといって赦しを乞う権利はあるのだろうか。」

青年への同情、迷いも出てきた。しかし結局、赦すことは出来なかった。沈黙を貫いた、その行為は正しかったのだろうか？

それとも、悔悛をした若き殺戮者に赦しの言葉をかけるべきだったのだろうか？

プリモ・レヴィ（資料⑧）は、「拒絶するのは正しかった。あの武装親衛隊員は「子供じみている」。瀕死でなければ許しを乞う行動に出なかっただろう。」

一方ダライ・ラマ（資料⑧）は、「赦すべきだった。自分自身と人類に対して赦すべきであった。必ずしも赦し≠忘却ではない。「赦す、しかし忘れない。」忘れれば同じ過ちが繰り返されることになる。中共によって獄に入れられたチベット僧の言葉にびっくりした。彼は「最も恐れたことは中国人に対する思いやりの心を失うことである」と言った。」

## まとめ

### 復讐・罰・赦し

第一に、個人—個人、集団—集団、個人—集団の間に、赦しの対象となるようなもの、「害」が生じる。その害に対する反応は、3 種類あった。

#### ①復讐 revenge

これが最も natural な自動的な反応である、とアーレントは述べている。（本当にそうだろうか？）

しかし復讐の中では報復の連鎖が生まれてしまう。（→近代社会における私罰の禁止）

※復讐心 ressentiment に関して

ニーチェは『道徳の系譜』の中で、フランス革命の指導者ミラボーについて「彼は赦すことの出来ない人間だった。」と述べている。その理由は「彼はそもそもルサンチマンを持たない。どんなに人に批判されても、それを忘れてしまって意に介さない。」からであると述べている。復讐心を持たない人間は赦すことができない、というテーゼが示唆されている。ちなみに、ルサンチマンから解放された人間は“超人”である。

## ②罰 punishment

復讐の連鎖を止める行為の一つ。罪にふさわしい罰を与えることで応報的正義 retributive justice をかなえる。カントは同害復讐（タリオの法）、つまり加害者が与えた罪と全く同じ罰を与えることを支持した。なぜならこれが最も理性的であり、これ以外に明確な基準はないからである。（私罰 revenge は大きさにブレーキがない）

しかし、現実問題として同害復讐は可能だろうか？という問題がある。与えた“行為”ではなく、与えた“苦痛”と同じ“苦痛”を与える、と解釈すれば少しは融通が利く。

## ③赦し forgiveness

罰を科さずかつ復讐の連鎖を止める行為。（現実には、被害者が赦しても社会という第三者が加害者に罰を課す、という場合は数多くあるが。）

赦す“権利”を持つとは、復讐や刑罰を科す“追求する権利”を放棄する権利を持つ、ということ。

# 「赦し」には似ているけれども違うもの

## I 法的な赦し

i 時効・・・法的な責任の追及の権利が放棄される。公訴権の消失。

ii 恩赦・・・国家元首がその人の一部の罰を減少させる

iii TRC・・・Truth and Reconciliation Commission

## II 忘却

時間と共に記憶が薄れてしまうことが忘却であるが、記憶が薄れたからといって赦しは意味しない。赦しは単なる時間の問題ではなく、むしろ意思の問題である。赦しの結果忘却することはあるだろう。一方で、赦すけれども忘れない、ということもある。

ジャンケレヴィッチは、法的な赦し（時効）を与えることによって忘却すること、忘却と共に法的な赦しを与えようとしていることに抗議した。

# 整理した表(2011年のシケプリから転載。章分けはそのまま。)



	加害者側 (赦しの客体)	赦しを乞う言葉	被害者側 (赦しの主体)	赦し
2 アーレント	当人	関係ない	当人とその民族	不可能。極限悪であるから。
3.ジャンケレヴィッチ	当人とその民族	ない	当人とその民族	不可能。まず、赦しを乞う言葉がないから。そして、犠牲者当人以上は赦す権利を持たないから。
4-1 闇サイト殺人事件	当人	なし	当人の家族	非成立。犯罪の残虐性による？ 復讐心の分の罰を求める。
4-2 高校生首切り事件	当人	なし	当人の家族	非成立。反省的態度なしのため。
4-3 カラマーゾフの兄弟 第6編	当人	あり	不在	不明。良心の呵責があるため、成立する可能性は高い
4-4 佐賀・西鉄バス乗っ取り事件	当人	不明	当人	成立。被害者による加害者の理解による
4-5 レ・ミゼラブル	当人	なし	当人	成立。被害者による加害者の理解による
5-1 カラマーゾフの兄弟	当人	なし	当人の母親 or 第三者(神)	イワン一子に対する罪に関しては不可能。母親には母親へ苦痛を与えた分の罪を赦すことまでしかできない アリョーシャー神による赦しが可能。
5-2 シークレット・サンシャイン	当人	なし	当人の母親	不成立。当人が赦す前の“神赦した”という発言が不当。
5-3 アーミッシュの赦し	当人の家族	不明	当人の共同体	成立。神が赦す前に人間が赦し合わねばならない、という信仰
5-4 The Possibility of Forgiveness	当人	あり	当人	成立。神が赦す前に人間が赦し合わねばならない、という信仰
5-5 神様のプログラム	当人の民族	不明	当人と同じ民族の一人	成立。神の啓示による。
*集団―集団間の赦し	当人の民族	あり（公式謝罪・戦争賠償金 etc.）	当人の民族	不明。解釈による。しかし少なくとも、現実的に考えて民族の一人残らずが赦す気持ちになる、ということはあるにせう。
6-3 ひまわり	当人の同胞	あり	当人	不明

## 付録：高橋哲哉教授関連過去問集

### 2011年度冬学期「倫理Ⅱ」

問題：以下の3つの項目の少なくとも1つには必ず触れながら、「赦し」について自由に論じなさい。

#### 1) ウラジーミル・ジャンケレヴィッチ

2) 無条件の赦し

3) ジーモン・ヴィーゼンタール

## 2008年度冬学期「倫理Ⅱ」

問題：＜倫理＞と＜倫理を超えるもの＞について、論じなさい。その際、以下の4人の思想家に必ず一度は言及すること。

キルケゴール    ヘーゲル    カント    ニーチェ

## 2008年度夏学期「社会哲学」

問題：以下の2つのテーマのうちから1つを選び、犠牲 sacrifice の論理との関係を考慮しながら、そのテーマについて論じなさい。

1) 「靖国の英霊」と「萬歳の交響楽」

2) 創世記22章とキルケゴールの解釈

## 2007年度冬学期「社会哲学」

問題：次の(1)(2)(3)の中から1つを選び、その意味を説明しながら、その議論を「倫理」との

関係でどのように評価するか、自らの考えを述べなさい。

(1) 抽象的普遍と具体的普遍

(2) ルサンチマン道徳と「根源的キリスト教」

(3) 悲劇的英雄と信仰の騎士

## 2007年度夏学期「社会哲学」

問題：以下の項目について、それがどのようなものであるかを説明し、それと関連させて、犠牲の論理について論じなさい。選択した項目を必ず明記すること。

1) 暴力的批判    2) 国民とは何か    3) 萬歳の交響楽

4) 戦死者の大祭典を挙行すべし    5) 死を与える    6) 軍國の母を訪ねて

## 2006年度冬学期「西洋思想史Ⅱ」

問題：カント、ヘーゲル、ニーチェと展開した西洋近代哲学において、人間の「自由」はどのように考えられたか。次の3つの事柄に必ず一度は触れながら、説明しなさい。

(1)人格主義 (2)否定性の経験 (3)ルサンチマン

### 2005年度夏学期「人間Ⅰ」

問題：次の3つのうち、いずれか1つのテーマを選んで論じなさい。その際、( )内の人名に必ず一度は触れること。

- 1) 赦しについて（アーレント、ジャンケレヴィッチ）
- 2) 死刑について（アイヒマン、ドストエフスキー）
- 3) 根源悪（カント、アーレント）

### 2004年度冬学期「人間Ⅱ」

問題：カント、ヘーゲル、ニーチェにおいて、「自由」はそれぞれどのように把握されたか。次の3要素に必ず言及しながら、解説しなさい。

- (1) 道徳律は自由の認識根拠（ratio cognoscendi）
- (2) 最高の共同が最高の自由である
- (3) 福音的实践

### 2004年度夏学期「社会哲学」

問題：次の1、2のいずれかを選んで回答しなさい。

1 次のいずれかのテキストについて、それがどのようなテキストであるか（筆者、時代、背景など）を説明したうえで、自らの視点で批評しなさい。

- 1) 「国民とはなにか」
- 2) 「生者の視線と死者の視線」
- 3) 「戦死者の大祭典を挙行すべし」
- 4) 「祖国のために死ぬこと」
- 5) 「母一人子一人の愛児を御国に捧げた誉れの母の感涙座談会」

2 いわゆる「靖国問題」について、その特殊性と普遍性の両面を顧慮して、自らの見解を展開しなさい。

### 1996年度

問題：ホロコーストの記憶にかんして、自由にテーマを選定し、問題点を明確にしつつ、自らの視点で批評せよ。必ずテーマを明記すること。また、ホロコーストそのものではなく、あくまでホロコーストの記憶が問題である点に注意。

\*テーマ例

- 1) ホロコースト否定論
- 2) イスラエルとホロコースト
- 3) 証言の有限性
- 4) ハンナ・アーレント
- 5) 加害者、被害者、目撃者
- 6) commemorative citizenship
- 7) 歴史家論争
- 8) ハムレット
- 9) 記憶の継承は可能か？